

HP トップページ <http://www.sciencehouse.jp/>

特集: 我が家の愛犬様

連載トップ http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/1_2b47.html

連載収録(1)～(15)まで

社長ブログに「我が家の愛犬様」のシリーズが登場した。社長の自宅に行ったことのある社員仲間の話では、あの犬は怖いねと言う者が一般的だ。だいたい見るからにオオカミ顔だものという声が多い。興味津々だが、「(2) “こわもて” の “ごろにゃん”」などを読むと愛嬌はあるのかも知れない。社長の犬好きも初めて知ったが相当なものだ。このくらいの勢いで営業をしてくれたら、われわれはもっと給料が上がるかも知れない。でも、社長の普段の集中力は並大抵ではない。それでいて、「ノム・ウツ・カウ」のどれもやらない。仕事ばかりが趣味という猛烈中年だ。どこで息抜きしているのかと思ったら、やっぱり秘密があったということだ。他人の秘密を知るのはちょっと楽しい。こんな社長だからこの会社も持っているのかも知れない。

署名にある「琵琶」とは社長のネットネームである。(SH Web Master)

(補1) この記事を引用または翻案して、公的に発言または発表される場合は、事前にメール等でお知らせください。

(補2) 社長の個人ブログは下記の通りである。今も記事は書き続けられている。

<http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/>

(1) 我が家の愛犬様

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/1_2b47.html

2005/09/12

(1) 我が家の愛犬様

我が家には、まもなく4歳になる雄犬がいる。はなはだ乱暴な犬である。中型犬に属しているから、散歩道で出会うレトリバーなどから見るといかにも小さく見える。しかし、全体に黒くて、眼は釣りあがっていて、口はややだらしなく、いつも半開きにしていることが多い。赤い唇の中には、いつも自慢の鋭い牙が見えている。長い犬歯ばかりではなく、奥

歯まで鋭利である。その様子はいかにもオオカミである。飼い主以外にはなつかない。

昔、イヌ科の動物を研究している研究者がイヌとオオカミの違いを説明してくれたことがある。飼い犬は足の裏の肉球が退化しているのでフローリングやコンクリートの上を歩かせるとツメが床にあたってカタカタと音がする、オオカミはぬれた岩肌でさえ滑らないで走れるように、また音を立てずに獲物に接近できるように足の裏の肉球が発達している、ということだった。我が家の愛犬様は、玄関のフローリングを歩いて石畳みの上を歩かせてもツメの当たる音はしない。肉球が著しく発達しているのである。背後から音もなく近づいているのに気がついてびっくりすることがしばしばある。

疾走する速度はきわめておおきい。正確に測ったことはないが、500メートルくらいの距離ならば軽々と15秒程度で走り抜ける。1キロを30秒かかることはないだろうと思われる。換算すると100メートルを3秒程度で走ることになる。跳躍力にもしばしば驚かされる。私の背中から音もなく走りよってきて、いきなり肩に手足をつけて軽く飛び越しながら、「やった」とばかりの得意満面の表情で振り向きながら着地することもある。ご主人を出し抜いてやったという快感なのだろう。彼の堅くて鋭い牙は、たいていのものを、金属の刃物でスラリと切り払うように切り裂いてしまう。こうして肩越しにヒトを飛び越えられるということは、そのヒトが敵であれば首筋を一瞬にして切り裂いているに違いない。我が家に来たばかりのときは、ふざけるつもりで軽く私の手を咬むと当時から2センチ以上あった鋭い牙がいとも簡単に手の甲を貫いてしまうのであった。ここであわてて手を引っ込めたりすれば、牙の刺さったままの手の甲は真っ二つである。実際、右手の小指の下のふくらみは2回も切り裂かれた経験がある。鋭利な刃物で傷ついた人ならば記憶にあるだろうけれど、その瞬間はぞくっと悪寒が走るが痛みも打撃も感じない。人の肉など、躊躇なくいささかの抵抗もなくスパッと切る。必要運動量は猛烈にある犬なので、一日3回の散歩を要求する。家族が交代で散歩させるのだが、人間様がへばってしまって、最近では1日に2回に減らしてもらっている。愛犬様は大いに不満である。

似たわんちゃんのホームページ

<http://home.m04.itscom.net/kamiyama/>

処分されるはずの犬や猫を引き取って里親を探すボランティア団体からもらったので、血統書はないが、見かけと性癖から判断して、甲斐犬系統の雑種と推定される。シェパードの血が幾分混じっているような気がする。甲斐犬は日本で一番オオカミに近い犬といわれる種類である。

この、我が家の「こわもて」の愛すべきやんちゃ坊主について、折に触れてここに書いてみたい。

琵琶

(2)「こわもて」の「ごろにゃん」

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/2_719c.html

2005/09/12

「こわもて」の「ごろにゃん」 -我が家の愛犬様(2)

我が家の愛犬様は元気がよくて、はなはだ乱暴であると書いたが、反面、大変な甘えん坊である。

とは言っても普段はその本性を隠して、ひたすら「こわもて」の面ばかりを強調して生きているのである。郵便屋さんも宅配のお兄ちゃんも、たいていは、愛犬様のツナの届かぬ遠くから、携帯電話で家人に救いを求めてくる。我が家の愛犬様は、耳をぴんと立てて、上目遣いにうなり声を上げ、ツメを立てて、地面を搔いて見せて、爪の鋭さを見せ付けて威嚇するのである。それでも立ち去らない相手には、牙を剥いて威嚇する。あの牙を見たら、よほどの犬好きでなければ、恐怖におののくしかない。

しかし、彼には、他人に知られたくないもう一つの面があるのである。ご主人である私が帰ってくるのが待ち遠しいのである。夜はさびしくてたまらないのだ。私が帰ってくると、立ち上がっておねだりすることがあるのだ。「抱っこ」である。彼は、私が「抱っこ」してあげないと安眠できないのである。こんなことを運送屋のお兄ちゃんに知られたらどうしよう、と思っているかどうかは知らないが、とにかく「抱っこ」は欠かせない。

彼は玄関のタタキの部分にしつらえてある立派な寝床(息子が作った)で寝るのであるが、夜、私が帰宅するとそわそわと落ち着かない。両手を前にして2本足で立ち上がったたり、ジャンプしたり、かわいく鳴いてみせて呼んでみたりする。タタキとフローリングを仕切っている低めのサクを取り払ってあげるといそいそと私に寄ってきて、頭を押し付けて、ゴリゴリともがくのである。「抱っこ」をおねだりするときの彼の精一杯のゼスチャなのだ。私がどっかとフローリングの玄関マットの上にあぐらをかくと、愛犬様は私のひざの上につく。あぐらの上で向きを変えて、頭を右に前足を右のひざに後ろ足を左のひざに乗せると、頭を

上に向けて、のけぞるしぐさを見せるのである。その方向にひっくり返して抱っこしろというゼスチャなのだ。その通りしてやると、頭は左のひざを枕にして、お腹とお×ん×んは仰向けで丸見えの状態になる。この状態で、胸、腹、あごの下を満遍なく指先で搔いてあげるのである。愛犬様は仰向けのまま口を半開きにして舌をだらりと出して恍惚の表情を見せる。それまで激しく動いていた愛犬様が急におとなしくなる。私の奥様は、「まあ、甘えちゃって!!」と嫉妬の声を上げるのがつねである。ときどき、恩返しのつもりか、私の手をなめる。手の甲を激しくしゃぶるようにすることもあるが、母犬の乳を思い出しているのかも知れない。

しばらく、そのままにしていると、眼はうっとりとした感じで狭くなり、眠気と戦う状態になってくる。このころあい、「お部屋に行って、寝んねしな」と言うと、寝ぼけ眼のままあわてて、身を反転して、本来の寢床にふらふらと向かうことも多い。いつもこうならばいいのだが、寝ぼけ眼のまま、身を反転してから、あわてて、イヤイヤをする様子で、もう一度、ひざの上で仰向けになろうとジタバタともがくこともある。こうなるとなかなか寝てくれない。仕方がないので、抱きしめたり、もう一度仰向けにしてやったりする。何度か、「お部屋に行って、・・・」と、「抱っこ」を繰り返しているうちに、愛犬様が根負けしてすごすごと寢床に向かうか、私が短気を起こして寢床に強制的に運び込んでしまうことになる。母親が赤ん坊を寝かしつけるときの悪戦苦闘と似ていないでもない。

しかし、どうだ。昼間の猛々しい様子と、この夜の甘えんぼぶりの落差は。まあ、人間でも、似たようなことはあるのだろうな、と思いながら、夜な夜な、嬉しくも大変な時間をくりかえしているのである。

琵琶

(3) 出会いのころ

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei/log/2005/09/3_91cc.html

2005/09/13

出会いのころ -我が家の愛犬様(3)

以前飼っていた飼い犬が死んでから3年半が経っていた。犬の家族はほしかったが、死んだときの悲しみを想うとなかなか新しい犬を求める決断ができなかった。

休日の買い物の途中、ペットショップに立ち寄って、子犬を見て、ため息をついていた。前にいた飼い犬の最後の顔が思い浮かんだ。ため息には、もう一つの意味もあった。当時も当家は貧乏だったので、そのお値段と、その後の飼育の費用を考えると我が家の生活が成り立つかという心配があった。私は、社員が「世界で一番貧乏な社長」とはやし立てる貧乏暮らしである。社員に給与を払うのが精一杯なのだ。実は、月額3万円ほどの講師料は貴重な収入である。子犬をまた飼い始めることは長く躊躇していた。

ある日、家内が、自転車で30分ほどのところのセミナーに出かけた際に、近くの公園を通り過ぎようとする、なにやら人だかりがあった。家内は、私の携帯に電話をしてきた。「××公園にいるよ、犬の赤ちゃんがたくさん・・・」私と息子が自転車を取り出すと、その公園に向かった。いた、いた！ いろいろな種類の犬がいる。大人の犬もいるが子犬もいる。まだ眼があいたばかりらしい赤ん坊もいる。本当にたくさんいる。息子に「ほしいか?」と聞いてみる。「う～ん。お父さんの好きにしたらいい(息子)」息子は、我が家の経済状態を慮って、私の顔を見る。実は、私には私の狙いがあった。いまこそ、私の家族には、新しいメンバーが必要だと思っていた。

この犬たちは、飼い主から捨てられたり、ブリーダーやペットショップが処分することを決めたような犬猫の里親を探しているボランティアの人たちが展示していたのである。譲り受ける場合の条件などを聞いているうちに、一つのオリに入れられているある一群の赤ちゃん犬たちが気になり始めた。真っ黒い犬である。眼は開いているらしいが、いかにもまだ歩くのもぎごちない。5匹いた。あまりにもやせていた。栄養が足りていないに違いない。こいつらの一匹をもらおう。私は、ボランティアの一人に「この中で一番元気のいい奴はどれ」と聞いた。「あっ、別にしてありますから、つれてきます」と言って、後ろにおいてあった車まで取りに行ってきた。「オスメスあわせて6匹の兄弟です。これはオスです」と説明された。ここで、その理由を深く考えるべきだったかも知れない(一緒のオリに入れられないほど元気とは、どういう状態?)。しかし、そんなことは思う余裕はなかった。そっと抱いてみると、私の手をガシガシと咬むが、まだ歯が発達していないので、小さな傷がついて痛かゆい程度である。「おー、おー、なるほど元気」などと言いながら、抱き上げる。子犬の背中を私のお腹にくっつけて乗せるような具合に抱っこして、前に回した私の腕に子犬の手を乗せると、おとなしくなった。それでも、盛んに手を咬むしぐさを見せる。小さい・・・。早速、息子にも抱っこさせてみる。まんざらでもない顔である。そのころ表情が極端に乏しくなっていた息子がわずかに微笑んだのを確認すると、「これにしよう。いいね」と強引に決めた。「一番、元気のいい奴」は、こうして我が家にやってくることになったのだ。

生後 10 日ほどと言っていた。すぐにもらって帰ろうとしたが、予防接種などをしてからということになり、さらに 6 週間ほどした 11 月 28 日に我が家に「元気印」はやってきた。我が家の愛犬様になったのである。逆算すると、10 月 1 日ころが、我が家の愛犬様の誕生日である。我が家の愛犬様がやって来た日から、悪戦苦闘は始まった。やせていて、いつもいらだっているようだった。エサは食べてくれるが、激しい気性をむき出しにして、ヒトを近くに寄せ付けない。近寄ろうとすると激しくほえる。手を出すと、咬み付く。エサのあるときにうっかり手を出そうものなら、ヒトは大出血となる。動きは速くて、眼に留まらないとはこのことである。首をかすかに左右に振ったかに見える、ヒトの手はバツリと切り裂かれている。息子の手はたちまちバンソウコウと包帯だらけになってしまった。家内もやられた。私もついにやられた。子犬の牙は細くて長い。ふざけているようなときでも、手の甲を簡単に貫通としてしまう。散歩に連れ出そうとしてもハーネスを嫌がる。最初の 3 日間は、夢中だった。ハーネスはその後も嫌がって、噛んで切り裂いてしまった。2-3 か月の間、3 つも買い換えることになった。散歩の途中で逃げ出すこともしばしばで、散歩がかりの息子はますます傷だらけだ。ところで、最初の 3 か日で、私は、大発見をした。このワンコの胸の辺りにすばやく手を入れて、かきむしるようにすると、咬んだ口をそっと離すのである。恍惚の表情さえ浮かべる。これは、70-80%程度で成功する。その後、私の手の傷は、牙の刺し傷に限定されるようになり、切り裂かれることは少なくなった。しかし、他のヒトが同じことをしても成功しない。ワンコの胸の辺りに手を近づけるだけで、手はもう一度切り裂かれてしまう。

愛犬様がやってきてから 2-3 週間目のころ獣医のところに出かけた。獣医が、なかなか近づいてこない。「この犬は、自分で引き綱を咬んで引っ張るような奴でしょう。一番怖い奴です」という。しかし、獣医はさすがにプロである。ワンコが獣医に噛み付こうとした瞬間、ワンコの開いた口の中に指を突っ込んで、ノドチンコを押さえつけたのである。ワンコはゲツという顔をして、口をあけたまま、身動きができなくなった。ワンコは悲しい悲鳴に似たうめき声をあげるだけである。これだ、私は、その後、愛犬様に咬まれる確率が極端に減ることになった。この技は、私しか真似できないが、絶大な効果をあげることになる。この技を使うごとに、愛犬様は、家族を咬むことを躊躇するようになったのである。家人の被害も激減した。が、今でも、家族外のヒトや、気に入らないことがあれば家人にでも、断固として咬むのである。犬らしく、簡単にシッポを振るような、ヤワさは微塵もないのがこの犬の特徴らしい。しつけができていないといえ、その通りなのだが。

ノドチンコ攻撃の後、仰向けにひっくり返して、胸や腹を搔いてやるのである。興奮がまだ醒めないと、この瞬間にまた咬まれるので、まだ

ノドチンコ攻撃をするのである。咬まなくなれば、しばらく胸や腹を掻いてやるとおとなしくなる。

これで、この「こわもて犬」の「ごろにゃん」の始りがどこにあるのか、その秘密が分かったに違いない。我が家の愛犬様は、胸や腹、あごの下を私にかきむしってもらおうと「キモチイイ～」という体験をかさねたのである。その後は、「キモチイイ～」をしてもらわないと寝付けなくなってしまったのである。

琵琶

(4) かわいい迷い犬

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/4_a017.html

2005/09/18

かわいい迷い犬--我が家の愛犬様(4)

我が家の周囲は市街化調整地域で、緑が多い。ねぎ畑が広大に広がる。周囲の住民にとっては、格好の散歩地帯である。

本日(9/18)の朝、我が家の裏庭によその犬がいた。隣に住む老母が8時頃に気がついて、われわれに知らせた。息子が駆けつけ、私と家内が続いた。小柴犬(メス、推定1歳くらい)である。小型犬用のハーネスを付けて、引き綱もついたままである。立ち尽くしていた。いかにも散歩途中のいでたちだ。体にまったく土ぼこりがついていないので、室内犬だろうと推測された。

おとなしい犬だ。我が家の愛犬様とは正反対と言ってよいだろう。不安で、人が近づくと、必死で後ずさりする。しかし、そっと、私の手を差しのべるとペロリなめて、身を寄せてくる。人なれしているので、飼い主に大切にされていた犬だろう。抱っこしようとするのが嫌がるので、抱っこには慣れていないらしい。私がワンちゃんを前向きに抱っこして前に回した私の右腕に前足をかけてあげるとやや安心した様子だ。他の家族も真似てみたが激しく抵抗して腕を抜けてしまう。抱っこがかりは私と決まってしまった。

今は、松戸東警察署に届けてあるので、この記事に気づいた飼い主さんは、警察に連絡されるとよいだろう。

ここには続いて、警察に届けるまでの間のワンちゃんと一緒の大冒険を書いておきたい。なんだか忘れがたい1日となってしまった。

ワンちゃんを発見すると、すぐに、近くに飼い主がいて探しているとかわいそうだと考えた。車に乗せて、周囲を何度も回ってみる。車に乗るのは慣れていないらしく、抱きかかえて車に近づくと抵抗した。車に乗ってきたのではないとすれば、歩ける距離の範囲かなと推測する。日曜日の朝なのでほとんど人通りがない。一方通行の小道にも入る。やや、大きな周回道路も回ってみる。一方通行の途中で、自転車に乗った若い主婦らしい人とすれ違う。バックミラーで後ろを見ると、自転車を止めて、畑のあぜ道に少し入り込んで何かを探している。「しめた飼い主か」と大回りして、後ろの道からもう一度一方通行に入って主婦の自転車に近づいて、声をかけてみた。「違います!」という返事。探しているのは犬ではないらしい。子供かも知れなかった。残念。やむなく、また自宅に戻る。

気を取り直して息子と一緒に近くの交番にも行ってみたが、「現在事件に対応中のため留守にしています」の小さな看板があるきりで無人だった。また自宅近くに帰って、近隣の人に、見覚えはないか、聞いて歩いてみた。誰も知らないらしい。

そのうち、このワンちゃんが突然走り出した。地面のにおいを確認しているので、一度は歩いた道に違いない。かなりの確信を持っているような勢いである。ついて行ってみることにした。小走りに走る、いや、かなり必死だ。私は引き綱を握りしめる。息子が後ろから走ってくる。走りながらの会話。「お父さん、歳なんだから、そんなに走ったらダメだろう(息子)」「なに大丈夫(私)」「自販機で水を買って、、、犬に水を飲ませないと、熱中症になっちゃうよ(息子)」「小銭の持ち合わせがないぞ(私)」「お父さんも水を飲まないよ(息子)」「あっ、千円札ならばポケットにあったぞ。自販機を探してくれ(私)」・・・、その間もワンちゃんは、地面に鼻を近づけたまま、必死に走り続ける。私も必死についてゆく。息子も併走する。地元の町会の役員たちとばったり出くわす。見ると町会の会館の前だ。出くわしても不思議ではない。この犬に見覚えがないかを聞く。「いや～あ、見たことはないね」とつれない。

ワンちゃんはなおも先に進む。曲がり角も、確信があるように走り抜ける。半地下の鉄道の線路をまたぐ道を駆け抜ける。めったに来たことのない町会長の立派な家の前を通り過ぎる。なおも走り続ける。お寺の門の前にたどり着く。手前の駐車場に入り込む。

駐車場の突きあたりは木が茂っているが、その先は切り落としになっていて道はない。しきりににおいを嗅いで、南東に向かってその先の遠くを見やっている。方向的には、そちらの方向に自宅があるのかも知れない。しばらく、その中を何度も行き来した。「もう、帰ろう」と私が声をかける。

駐車場を出ると、来た道に戻る気配はなく、その先に勢いよく進む。寺の門の前を行過ぎて、どんどん進む。地面のにおいを嗅ぎながら必死だ。そうか、もっと先なのか。私と息子は、犬の走るに任せて一緒に進む。右に折れて、畑に続く道に入り込む。その道は行き止まりである。畑の一画の未耕作地の中をしきりに嗅ぎまわる。南東の方向の空を見上げている。自信がなさそうである。少し戻ってあぜ道に入ってみる。立ち止まって、周囲を見回す。南東の空を眺めている。また未耕作地にもどる、どうも臭いの道を見失ったようだ。

しばらくすると、元の道に戻り始めた。私も息子もついてゆく。畑に続く道に曲がったところまで戻ると、元から来た道を進行方向へと直進する。勢い込んで進む。右手すぐ近くの農家の庭先に入ってゆく。その農家にも犬がいた。ほえられて、あわてて出てくる。元の道に戻るとまた進行方向にずんずん進む。どこまで行く気か、とそろそろ心配になってきた。かれこれ、1時間近くになる。

突然、屈強そうな大きな犬が道に立ちふさがるように現れた。私たちの連れてくるワンちゃんは立ち止まって、私の顔をそっと見上げる。明らかに救いを求めている。このワンちゃんは私たちを頼りにしているのだ！任せておけ、と私が身構えると道沿いの農家から主婦らしいおばさんが走り出てきて、この屈強な犬の名前を呼びながら駆け寄り、首輪をつかんで抱え込むようにする。すかさず、私は「このワンちゃんは、迷い犬なんです。ワンちゃんに任せてここまで来たのですが、見たことはないでしょうか」と語りかけた。おばさんは、屈強な犬を押さえ込むのに必死だったが、ジッと目を凝らしてくれて、「見たことない犬だね」と心配そうに言ってくれる。私は「そうですか、、、」と途方にくれる。内心では、ここまできたら、もうワンちゃんの自宅の近くであってもおかしくはないだろうにと思っていたのである。残念だが止むを得ない。「もう帰ろう」とワンちゃんに語りかける。

軽く引き綱を引くと、しぶしぶワンちゃんは後ろ向きになって歩き出す。しかし、どうも納得がいつているふうではない。足取りは重い。とはいえ来た道を素直に引返す。先ほど通り過ぎたお寺の門の前をまた通る。鉄道の上を再び渡ってもどる。左手の民家の庭に入り込む。しきりに臭いのか。庭を通り過ぎて、その先の畑に足を踏み入れて、南東の空を仰ぐように空気を嗅ぐ。方向はやはり南東の方向なのかと思う。行き先を失ったように、また来た道に戻る。すぐ先の民家にも同じように入り込む。おうちの方たちごめんなさい、と心の内で声をかける。祝日の午前中なので家の方たちはみなまだ寝ているのだろう。どの民家も人の気配を感じない。同じように庭の向こうの畑に一步だけ足を入れて、しばらく空の臭いを嗅いでいた。

力なく、ゆっくりと振り返って、元の道にもどる。戻りかけながら、急にまた小走りになる。向かうのは帰る方向ではない、先ほどの道の方向

だ。一気に鉄道の上をもう一度走って渡り、お寺の門の前を通過し、屈強なワンちゃんの家の前を走り抜ける。なにやら確信に満ちている。突き当たりの丁字路を迷わず右に曲がって、小走り続ける。林の中に行く細い道だ。「この先行き止まり」の看板が目に入るが、ワンちゃんはお構いなしだ。どんどん走る。私たちも走る。ワンちゃんの体が少し左右に揺れているようだ。息子が「だめだよ。水を飲ませないと、ワンちゃんが倒れるよ」と小さく叫ぶ。しかし、ワンちゃんは、夢中で走る。左へと緩やかなカーブをきる農道である。左には林が続き、右手には農地が広がってきた。「行き止まり」という看板からもずいぶん入り込んだが、道は続いていて、民家も先に数件まとまってあるようだ。このまま進めば、道は西に向かうことになる。民家の集まりに届く前に、ワンちゃんは農道を離れて右の長いあぜ道に入り込む。どんどん進む。あぜ道の突きあたりは、木が茂っているが、その先はまた切り落としになっている。関東ローム層の台地はどこでも同じようなものである。進むべき道はない。ここで立ち止まるとやはり、南東の方向に鼻を上げて臭いを嗅ぐ。しばらくたたずむが、力なく引き返し始める。元の農道に戻ると、また小走りになって、その先に進む。臭いを嗅ぎながら、確信があるかのような。民家のかたまりを右手に見て、その先に進もうとする。もうすでにワンちゃんの体力は限界に近い様子だ。体の左右のゆれは大きくなっている。道路際の民家の前に水道の蛇口が見えた。水を飲ませてあげようと、引き綱を引いて立ち止まらせて、水のありかを見せたが、激しく抵抗する。前に行くんだ、そんな暇はない、とワンちゃんと言っているようだった。農道は、林の中の小道になってしまう。人ひとり、と言うより、犬一匹が通れる程度のけもの道である。ワンちゃんの足取りも慎重になる。私も息子も続く。台地の切り落としを巻き込むようにして、ゆっくりと下に降りてゆく道である。木々の枝を透かしてみるとはるか下には県道らしい舗装道路がある。ずいぶんと遠くまで来たものだ。県道までの高さが次第に小さくなるがなかなか道は下に届かない。高さが2.5メートルほどになったとき、突然けもの道が崩れている部分に遭遇する。人が滑り落ちたらしい痕跡である。土の色はまだ新しい。半日も経っていないかもしれない。その下の細い木の枝は数本折れている。さらにしたの大きめの杉の枝は何かを大きく受け止めたように表面がささくれ立っている。何かはずり落ちた後らしい新鮮な土の部分はこの辺りで終わっていた。人が倒れていないか、とっさに周囲を見回してみたが、それらしい影はない。ワンちゃんの様子を見ると、ワンちゃんもここで立ち止まって、崩れた小道の部分とその下のほう、そして小道の先を何度も観察している。ときどき、私の顔を見上げる。何かを訴えているようだ。下に降りようかというしぐさも見せる。なかなか動こうとしない。しかし、下に降りるのは怖いらしい。もしかして、ご主人とここで別れたのかな、と思われた。傷の残る杉の大きな枝から県道まで

は1メートル程度の高さである。飛び降りても降りられないことはない。ご主人は小道から落ちてしまったが、途中の杉の枝に抱えられるようにして助かった。このワンちゃんは下に降りられなかった。あわてて、遠回りして下に出ようとしたか、誰かを呼ぼうとして走り続けているうちに我が家に迷い込んでしまったのかも知れない。想像にすぎないが予想が膨らむ。ワンちゃんの家のある方向は、南東方向だが、ご主人と別れたのは、ここなのかも知れないと思う。誰も見つけれないことを確認すると、ワンちゃんはしびしびのようにもとの方向に戻り始める。

農道に戻って、民家の集まりの脇に出る。民家の庭に一軒ずつ入って臭いを嗅ぐ。力なく農道に戻る。ワンちゃんの体は、よれよれと左右に揺れている。もう限界に達しない。

息子が「もうだめだよ。父さん、抱いてあげて」と叫ぶ。そうか、抱っこ係は私だ。抱き上げようとする、少し抵抗した。しかし、前向きにして、私の右腕に前足をかけさせると、おとなしくなった。左手でワンちゃんのおしりを支える。私はもと来た道を歩きはじめた。ワンちゃんは重くはないものの、私も疲れているのか、少し息が弾んでいる。息子が、「先に帰って車を取ってくる」と叫んで、走り出す。「町会の会館前あたりで待ち合わせよう」と私が叫び返す。息子は走りながら、おおきくうなづく。

抱っこして歩きながら、考えた。この犬はずうっとおしっこをしていないぞ。そうか、室内犬だからおしっこパッドがないとおしっこをしないのかも知れない。ちょっとかわいそうだなと思った。町会の会館に到着して見回しても息子はまだ到着していなかった。会館の庭に入って、庭の水道の蛇口を開けて、ワンちゃんに水を勧めてみたが、近寄ろうとしない。私の手に汲んで近づけても飲もうとしない。ワンちゃん用の容器でしか飲んだことがないのだろう。我が家の愛犬様とは大変な違いだ。のどが渇けば、ドブの水だって飲んでしまうような粗野な奴なのに、それに比べればこのワンちゃんはなんと上品なのだろう。おしっこもしていないので、水も飲めないのかも知れない。不憫だ。

やがて、息子が車に乗って会館前に到着。ワンちゃんを抱えて車に入れる。やはり車に乗る瞬間は抵抗する。助手席に乗せるとおとなしくしている。立ったり座ったり寝そべったりする。車の座席の表面はじゅうたんに似ているので室内犬には嬉しいのかも知れない。息子は冷蔵庫からペットボトルの水を持って来た。しかし、ワンちゃんに飲む気配はない。家で飲ませようとそのまま車のエンジンをまわす。我が家に到着すると、ワンちゃんは、さっと、小走りに、今朝このワンちゃんが発見された栗の木の下に駆け込む。そこが自分の居場所だといわんばかりである。息子は庭を案内するようにワンちゃんを庭のあちこちにつれてゆく。我が家の愛犬様が初めて異質な犬の存在に気づいて、激しくほえる。ワンちゃんは萎縮して逃げ出そうとする。やはり2匹のイヌを同居させるのは

困難だ。近くの私道の真ん中には、このワンちゃんのものらしいウンチも見つかった。やや乾いているので、前の晩から来ているのかも知れない。我が家の庭は、乱暴にして激しいわが愛犬様のおかげで、他の犬が入り込むことはめったにない。このワンちゃんは、そっと入り込んで不安のために気配を殺して、物音を立てないようにジッと立ち尽くしていたのに違いない。

「迷い犬 小柴犬、メス1歳位、預かっています」と大書した紙を道路に面した塀に張り出す。もう昼の12時に近かった。

息子とは、仕方がないから警察につれてゆこうと相談した。息子はいやなのか、「お母さん連れて行ってよ」と母親に役割を振る。母親がなぜ?という顔をしながらも「いいわよ」と引き受ける。息子はワンちゃんと別れるのが辛いのである。

私はワンちゃんを南のベランダの近くに連れてきてつなぐ。我が家の愛犬様からは見えないところで、人からは顔の見えるところがよいだろうという考えである。この時間帯は日陰にもなる。母親は、ダンボールを探して持ってくる。古いタオルも備えた。水を器に注ぐと勢い良く飲む。がぶがぶといつまでも飲んだ。よほど喉が渴いたのだろう。ダンボールの上のタオルの上に腹ばいになる。少し落ち着いたように見えた。このワンちゃんは土の上では決して腹ばいになったりしない。やはり室内犬なのだろう。

さて、私が自宅にいるときは私が食事係りである。昼どきの準備をしていると、息子がベランダから「お腹がすいたみたいだけど、どうする」と叫ぶ。舌なめずりしているのだろう。「ウチの犬のえさを分けてあげたらっ!」と私が叫ぶ。母親が食器棚から少し古いスープ皿を取り出して、「これをワンちゃんのものにしよう」と息子に手渡す。息子が淡々とエサをそのスープ皿に盛り付ける。ドックフードとビーフジャーキーを混ぜてやるのが我が家流である。これで食べてくれるかどうか少し不安だったが、ワンちゃんに差し出すとワンちゃんは夢中で食べる。我が家の犬と同量程度をすっかり食べてしまった。体格差を考えれば、通常の量の倍は食べたことになる。よほどお腹がすいたのだろう。

人間様の食事の用意もできて、もう一度ベランダを見やるとワンちゃんは、横になって足を投げ出して寝ている。四足動物は、不安があると横になって寝たりはしない。すぐに立ち上げられるように腹ばいのままのほずである。このように足を投げ出して横に寝る仕方は、この家を自分の家にしてもいいかなと思いだめた兆候である。

食事の後、いよいよ、ワンちゃんを警察に連れて行くことにした。かわいそうだが仕方がない。

母親と私がワンちゃんと一緒に車に乗り込む。寝床に用意したタオルにくるんでやる。はじめは落ち着いていた。途中、信号でブレーキを踏むたびに座席から落ちそうになる。やや重心が定まらない。少し落ち着か

なくなっている。もしかしておしっこがしたいのかなと思う。後ろの車は気になったがゆっくりと進む。警察書（松戸東警察署）に到着。黒い車が横付けになって、黒いベストを付けた私がタオルでくるんだ何か大きな包みをもって警察署の入り口に近づく。ドアを開けて受付に向かおうとすると、若い長身の警官が、制服を付ける間もなかったのだろう、シャツのまま、小脇の拳銃に手を当てながら、受付に向かう私をさえぎるように通路からあわてて半身をせり出して、「何でしょうか」と言う。ヤクザのカチコミとでも勘違いしたのだろうか。やれやれ、「マヨイヌです」と私は立ち止まってゆっくりとはっきりと言う。警官はとたんに漫才師がやるようなどっと崩れるしぐさを見せて、ワンちゃんの上に手を伸ばして「マヨイヌなの!」とため息とも叫びともつかない声を上げる。「何だ、なんだ」と別の警官も制服を片手に腕を通し損ねた状態で、拳銃に手を当てて後ろから前の警官を飛び越える勢いでやってきたが、小さなかわいいイヌを発見して、「へえー」と声を上げる。別の警官が白い紙（コピー用紙）をもって駆けつけてきた。「ここに住所を書いて」と言う。家内が住所と電話番号を書く。その間、イヌとじゃれている警官たちに私が経緯をかいつまんで説明する。「すぐに見つかるよ。大丈夫です。お預かります」と警官が言う。遺失物の調書も取らないのかなと考えたが口にはしなかった。なんだか、安請け合いのようで頼りなかったが、そのまま、預けることにした。持参したドックフードと数種類のイヌのおやつを手渡す。「言うことを聞かないことがあったら、イヌのおやつをあげてみてください。素直になると思います」と説明した。タオルごと預けた。振り返るのもかわいそうでそのままドアの外にでた。

そういえば車から出て、抱っこしたとき、タオルが濡れていたなとその感触を思い出した。あいつ、来る車の中でタオルにおしっこをしたんだ。やっとおしっこができてよかったが、あのタオルが、警察署ではおしっこパッドになるぞ、説明しておかなければいけないんじゃないかと心の中で反芻した。しかし、もう一度ワンちゃんの顔を見る勇気は出なかった。つれて帰りたくなるのが少し怖かった。

家に帰ると張り紙を書き換えて「迷い犬 小柴犬、メス1歳位、松戸東警察に届けてあります」として張り出した。松戸東警察の電話番号も書き添えた。飼い主さん、早く、松戸東警察に連絡してあげてください。

琵琶

(5)よかった！ 迷い犬の飼い主登場

2005/09/22

よかった！ 迷い犬の飼い主登場--我が家の愛犬様（5）

本日は某大学の秋学期授業の遅い始まりである。キャンパスはそこそこに遠い。授業では工学部の学生を対象に社会組織の構造を解説してインターネットがつながる工学的原理を教えた。同じ内容で2つのクラスを連続して教える日なので、喉がからからになる。ここからの帰り道、まだ電車の中だった。マナーモードにしてある携帯電話がポケットの中でブルブルと震えた。電車の中なので、躊躇していると切れてしまった。誰からなのだろうと取り出して眺めていると続いてまた携帯が震えだした。今度は家内からだった。「息子から電話があって、飼い主が現れたそうよ。飼い主にウチの電話番号を教えてよいかどうかと警察が言ってきているということです」「了解。教えてよいと伝えてくれ」と短く会話を済ませる。さっきの電話はきっと息子からだったのだろう。私につながらないので家内に電話したに違いない。

そうか、飼い主が現れたんだ。心が躍った。

しかし、余計な心配もふつつつと沸き起こる。仔犬がほしいだけで、飼い主を詐称してくる場合はどうだろうか。しかし、飼い主とニセ飼い主は、ワンちゃんが見分けるのではっきり区別ができるだろう。警察で犬を預かっている担当者が犬好きならば犬の微妙な態度の差に気がつくだろうしと悪い推測を打ち消したりもした。

電話番号を教えてよと言ったのは、ニセの飼い主だったら取り返してやろうという魂胆がむらむらと起こったからである。

私の場合、大学の仕事が終われば、会社の本業が待っている。オフィスに戻って、社員と打ち合わせをしたり、雑用をこなしたりした。帰宅したのは23時頃である。

帰宅してから、息子からいろいろと聞いた。

13時半過ぎころ、隣の家の大工仕事に来ていた職人が、家の前の張り紙「迷い犬、小柴犬、メス、1歳位、××警察に預けてあります」をしげしげと見ていた。3時半頃に警察から、「飼い主という方からの申し出があって、今警察署のほうに向かっています。到着したらお宅の電話番号を教えてもよいでしょうか」という電話があった。約20分後、警察からはまた電話があり「ただいま飼い主さんがきました。99%正しい飼い主だと思いますが、電話番号を覚えてしまっていいですか」と言う。「結構です」と息子は応えた。

それから、1時間半ほど後に、飼い主の奥さんらしい人から電話があり「マ　　といます。今、犬を連れて自宅に戻ったところです。ありがとうございました。××高校の近くに張り紙をしてくれたのでしょ

か」とおっしゃった。「はい、父が張り紙をしていました」と息子。「ありがとうございます」と飼い主の奥さんらしい人。それ以上の会話はなかったようだ。あのワンちゃんを連れて帰った飼い主らしい人の住所も電話番号も分からない。マ　　という人は周辺にたくさんいる。ほとんど手がかりはないに等しい。息子が言うには、この奥さんは直接張り紙を見たわけではなさそうで、誰かから聞いたと推測されるということである。息子は、張り紙を見ていた若い大工さんが、たまたま飼い主を知っていて教えたのではないのかと推測しているらしかった。

「ニセの飼い主だったら、いやだなあ」と私が渋い顔をしていると、家内は「ニセの飼い主でも飼ってくれるのであればありがたいですよ。処分場送りになるのが避けられるだけでもほっとしたわ」という。なるほど、そういう考え方もできるな、と関心した。

いや、たぶん、正しい飼い主なのだろう。だから、堂々と電話をしてきたのだろうと楽観的に考えることにした。ワンちゃんを引き渡すにあたっては、警察も「飼い主」を吟味しただろうし、何よりもワンちゃんが識別しただろう。家内が言うように、万一二セの飼い主でも飼い主は飼い主。ワンちゃんを生かしてかわいがってくれるのであれば、ありがたいと思うことにしよう。

ひとまず、一件落着だ。日曜日にはじまった心労のタネは一つ解消した。万歳！ばんざい！

琵琶

(6) 迷い犬の飼い主親子たちが尋ねて来た

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/6_0f1d.html

2005/09/24

迷い犬の飼い主親子たちが尋ねて来た--我が家の愛犬様(6)

昼ころ、ドアの外で声がした。我が家の愛犬様は、たまたまお昼寝のために玄関の中にいた。玄関の中から愛犬様は激しくほえる。玄関のドアを開けるとわが家の愛犬様が外に飛び出すだろうという状況である。おおあわてで、愛犬様を引き綱につないで、ドアをそっと開けてみる。男の子が二人とそのお母さんらしい女性が、なにやら大きな荷物を持って外に待っていた。子供たちはそれぞれ小学生と中学生のようだった。二人の子供たちは、頭をぺこり、ぺこりと下げて「ありがとうございます」と言った。犬は連れていないが、飼い主の親子に違いはないだろう。奥

さんは「ありがとうございました。マ　　です。もらって1か月半だったんです。朝の8時5分くらいに、小学校の裏手の倉庫のそばまで犬を連れてでると倉庫で作業している先生方らしい人がいました。迷惑がかからないように抱き上げていると、倉庫の扉がバターンと大きな音を立てて閉まったんです。あの子はその音にびっくりして、腕から飛び降りて走って行ってしまったんです。たまたま、私は足が痛くて走れなくて捕まえられませんでした。こんなところまで走ってきたんですね」と言う。「ええ、我が家で見つかったときは8時過ぎでしたから、その後すぐだったんでね」と私は予想（もしかすると前の晩からいたのか）に反していたので少し驚いて答えた。

それにしても、あのワンちゃんが私をぐいぐいと引っ張って向かった方向とはずいぶんな方向違いである。と言うことは、ワンちゃんは、新しい飼い主さんの下ではなくて、元の飼い主さんの自宅に帰りたかったのであろう。豆柴犬は飼ったことがないが、柴犬はかつて飼ったことがある。現在の我が家の愛犬様よりはやや控え目だが、喧嘩上手で周囲の大きな犬にも負けたことはなかった。帰巢本能はきわめて強い。和犬に共通して、「主人は生涯一人しか持たない」といわれるくらい、最初の主人に執着する。もらわれた先の主人には洋犬のようにすぐになついたりはしないのである。聞いてみれば、いろいろと事情が判明してくるものである。

もらわれて1か月半、ワンちゃんはその間もずうっとさびしい思いをしていたのだろうなと思うと、不憫である。大きな音に驚いたときも、安心できる元のご主人の下に一目散で走ってゆきたかったのだろう。その途中、行き先に迷って、我が家に迷い込んだのだ。しかし、今の飼い主にそう説明するのは、気の毒に感じたので、このことについては何も言わなかった。

ひとまず、「ニセの飼い主かも知れない」などと疑ったことを反省した。息子たちのはしゃぎようを見れば、ニセの飼い主ではないことがわかるというものである。

そうこうしているうちに、我が家の愛犬様は、珍しい客に激しく挑みかかるようにほえていたかと思うと、体を激しくくねらせて、首輪を見事に抜いてしまった。とりあえず庭中を一回駆け抜けると、玄関先に戻ってきて、お客さんたち（飼い主の親子たち）を玄関の私と挟み撃ちにする位置で、激しく吠え立てる。猟犬が獲物をご主人様の方向に追い立てる行動である。こうなっては大変。息子も家内も飛び出してきた。息子は、鎖をもって愛犬様を追いかけ始める。家内は、一度様子をうかがってから、家の中に戻って、乗用車の鍵を持ってきた。なかなか機転が利いている。実は、我が家の愛犬様は、車に乗るのが大好きなのだ。牝犬を追いかけて家出をしてしまったときも、車で追いかけて、お目当ての牝犬の家の前に行くと、車に飛び乗ってくる。お気に入りの牝犬の前で

は、主人である私の制止も聞かずに、引き綱を振りきって牝犬に突進してゆくのが常なのだが、車が来るとそれほど好きな牝犬さえ見捨てて、車に乗ってしまうのである。これを思い出した家内が、車の座席を捕獲用のワナに仕立てたのだ。案の定、車にドアを開けて家内が呼ぶと、息子に追われてかなり遠くまで行っていた愛犬様が猛スピードで車のある位置に駆け寄ると躊躇なく座席に飛び乗った。車のドアを閉めて、家内が私を呼ぶ。家内は勝ち誇った顔だ。

困ったことに、この騒ぎで飼い主たちとの会話は中断されてしまった。ともかくも、と、大きな梨の実の一袋とコーギーコーナーの大きなお菓子の箱をいただいた。私は「ありがとう、ボクたち、ワンちゃんと仲良くして、大切にしてくださいね」と言うのが精一杯だった。親子たちは帰った。

これからが大変である。我が家の愛犬様は、不満を募らせている。せつかくいいことをしてあげようと、"獲物らしき"親子連れを追い込もうとしたのに、逆に自分が追い払われて、ことのついでに庭先を存分に走ろうと思ったら、計略にかかって、車の座席に押しこめられてしまった。一度は、私の誘導で車から降りて玄関先に向かうかに見えたが、不満を爆発させて、私の手を激しく咬むマネをして自由の身になると、また庭中を走り始めた。私の顔をちらちらと見ながら、隣家の庭もなんのその、休むということを知らないのかとあきれんくらいに何度も何度も走り抜けてゆく。舌の先からは彼の唾液が空を切って飛んでゆく。仕方がない、と私はまた車のドアを開ける。今度も近づいてきたが、中には入ろうとしない。もう、だまされないぞ、という態度だ。「分かったよ。お父さんも車に乗るから」と愛犬様に語りかけて私が手招きしながら運転席に乗り込む。愛犬様も私のひざの上を駆け抜けるように車に乗り込む。助手席が愛犬様の定位置である。私のズボンは泥で犬の足型がいくつもついた。息子も後ろの座席にあわてて乗り込んでくる。

まもなく、車は滑り出して、周囲の散歩道をゆるゆると走る。愛犬様は、ご満悦だ。車の疾走感はたまらない。眼はランラン、息は荒く、前足でフロントの小荷物入れの辺りをがりがりとやってみて、左のガラスの隙間から外のおいをかいでは、長くたらしした舌を左右にゆらゆらと揺らせる。明らかに興奮状態である。

周囲を一周してまた自宅に近づくと、私が「おうち、に帰るよ」と言う。愛犬様は、いつものように、耳を半分私のその声に向けると、座席の中央に戻って、興奮をやや抑えるのである。これでエキサイティングなお楽しみは終わりなんだと彼は納得するのである。

自宅に帰って、首輪が抜けてしまったときの引き綱を見ると、なんと首輪につながる金具の部分が壊れていた。金具が割れていたのである。新しい引き綱を買ってくるしかないだろう。体を激しくくねらせたと見え

たとき、金具は彼の硬い牙によって破壊されていたのだ。なんという乱暴な奴なのだろうと、改めてあきれてしまった。

琵琶

(7)メス犬大好き

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/7_0406.html

2005/10/16

メス犬大好き--我が家の愛犬様(7)

我が家の愛犬様はオスなので、メス犬が大好きである。大変健全でけっこうなことであるが、いろいろと問題が発生する。

人間様が決めているお散歩ルートはどんなときもたいてい気に入らない。もっとたくさん歩きたいのに、人間様は何でこうも安直なのか、この山を越えてゆけば、もって素敵な友達も広場も待っているというのに、といつもご不満である。私が散歩しているときは少し抵抗して見せるものの「ちえ、しょうがねえ、付きあってやるよ」と一応従うが、息子や女房のときはそうは行かないらしい。激しく格闘して帰って来るらしく、毎度愛犬様との綱引きの報告がされる。「今日はね、たいへんだったんだよ。～、～」と、話題に事欠かない。

発情期になるともっと大変なことが起こる。散歩の途中、人間様の様子をそ知らぬ顔でうかがっていて、突然の「縄抜け」をやってくれるのである。信じられないことに、かなりきつく締め付けてあるはずのハーネスがそのときばかりはユルユルになって、前足をちょいと上げて激しく後ずさりすると、愛犬様の体がスルリと抜けてしまうのである。その間、1秒とかからない。油断は大敵である。「骨はずしの術」を体得している忍者犬なのかとあきれてしまう。しかし、あきれたり、関心したりしている暇はない。愛犬様は、1メートル以上いっしゅんで飛びずさると、口を開け舌を大きくたらしめてへへッとばかり勝ち誇った表情をすると、一目散に走り出す。目指すは、そのときに気に入っているメス犬のお宅である。さあ、たいへん、メスのワンちゃんのいるお宅がパニックになるのは眼に見えている。「おい、待て」と追いかけることになる。呼べども立ち止まることなどありやしない。追いかけても追いかけても、走り行く。その距離、約300メートル。次の道の角では、後ろを振り向いて飼い主様がついてきていることを確認している。近づけばまた走り出す。次の角ではまた待っている。飼い主がついてきていないと少しは心

配らしい。まあ、「俺について来い」ということかも知れない。完全に愛犬様の主導権の下で、私は走らされているのである。

目指す、ワンちゃんのお宅に到達すると、塀の外で、まずは行ったり来たり、セレナーデを奏でるわけではないが、その恋心全開で全身でそのキモチを表している。門の扉が開いていたりしようものならば、もっと大変である。私が50メートルほどの距離に近づくのを待って、いきなり突入する。「ああ～あ、やってくれたよ」と私は眼を覆いたくなる。メス犬が庭に出ていれば、鼻先で互いにご挨拶をしているころ、私も到着。お宅の方への挨拶もそこそこに、庭に私も駆け込む。愛犬様はこのときはご主人様よりもメス犬のほうが大切である。私に向かって低くうなり声を上げ、首だけを後ろに回して歯を剥いて構える。ここで、うっかり手を出すと本当に噛み付かれて大怪我をするはめになる。ほうっておけば少なくとも愛犬様の家宅侵入罪は免れない。ヘタをすれば乱暴狼藉の罪に問われかねない。メス犬の飼い主によっては、箒の柄で殴りつけてきたりする。これはかえって危険な行為だ。愛犬様を本気で怒らせると反撃が半端ではない。ここは猛犬使いの私の腕の見せどころである。2.5メートルほどの位置に私は立ち止まる。「おい、おい、ダメじゃないか。こっちにおいで」と腰を低くして手を斜め下に広げる。「ダッコ」のポーズだ。愛犬様はかすかに尻尾を振る。シメタ、関心をもったぞ。私は一歩前に進む。またうなり声を上げて歯を剥く。私は立ち上がって、大きく手を広げる。襲い掛かるぞ、のポーズである。愛犬様は、あわてて腰を落として、頭を低くする。半分は服従のポーズだ。それでもうなり声をあげる。私はもう半歩前にでる。愛犬様は、さらにあわてて伏せの姿勢になる。こうなってもまだ安心はできない。まだうなり声は上げている。イヤイヤの服従だ。手を出すとまだ咬みつかれる危険がある。私は「こらっ」と声を上げて、一気に一歩近づく、愛犬様はぎょっとしたように、ハラを見せてひっくり返る。完全な服従の姿勢である。こうなれば私の完全勝利である。「よしよし」と言ってゆっくりと抱き上げればよいのである。しかし、こうなっても急ぎすぎたりすれば、腕をかまれたり、腕をすり抜けてしまうこともある。愛犬様を抱き上げてしまえば、お邪魔したお宅の方に「申し訳ありません。すいません」とひたすら謝る。なぜか、このところ仕事以外でも謝る回数が増えた気がする。その間、約20分、汗はびっしょりである。

最近では、同年代(3-4歳)のメス犬を好んでいるようだが、半年ほど前までは、メスの老犬(10歳以上-15歳くらい)ばかり追いかけていた。動物界では経験の浅いオスは子育ての経験豊かと思われる年長のメスを尊重するのだそうである。愛犬様もいたって自然な成長を遂げているので、老メス犬を好んだ。最初に愛犬様が恋したのは田中さん(仮名1)のお宅の14歳(当時)、その後恋したのは佐藤さん(仮名2)のお宅の13歳(当時)だった。今でも、息子が愛犬様を連れて出るときには、田中

さんのお宅や佐藤さんのお宅の前は散歩コースに組み入れられている。愛犬様は浮気なやつで、あちこちに恋人がいるのである。必ず立ち寄って、しばし、においをかいでいる。田中さんのお宅のメス様は現在16歳で、生きているのが不思議なくらいに足腰がすでに弱っている。お宅は私の散歩コースからは外れているが、散歩の途中でよくお目にかかる。このメス犬様は端正な顔立ちで若い頃はさぞかし美人(美犬?)だっただろう。ご主人も老夫婦で、おばあちゃんやおじいちゃんが老犬を連れてゆっくり、ゆっくりと散歩する姿はほほえましい。我が家の愛犬様は、それでも彼女(メス犬様)に駆け寄ってゆく。このメス様は気位が高く、本当の意味で一貫して愛犬様を寄せ付けない。鼻を寄せて挨拶するのには応ずるが、愛犬様が図に乗って、やや横に回ったり後ろに回り込もうというそぶりを見せると、激しく鼻先で愛犬様を突き飛ばす。愛犬様はメス犬様に対しては、ほえることがあっても反撃したりはしない。ぱっとその場を飛びのくと悲しそうな表情を見せる。2-3度そんなことを繰り返すと、愛犬様は、やむなく私の顔をチラリと見て、「もう、～、帰る～、～、、、、」というかのようにその場を立ち去るのである。一方の佐藤さんのお宅のワンちゃんは、先月、亡くなってしまった。享年15歳、ガンだったそうである。亡くなったとは知らずに息子が愛犬様に連れられて佐藤さんのお宅の前に到着するとしばらくにおいを嗅いだあと、愛犬様が家の中に向かって2-3度ほえた。「どうして出てきてくれないんだ」とじれたかのような。佐藤さんの奥様が出てきて、ワンちゃんが亡くなったことを告げ、残ったそのワンちゃんのエサをくれた。こんなに好いてくれた犬に食べてもらえればうちの仔も本望でしょう、と奥さんは言ったそうである。いただいたエサは、高級な缶詰タイプのもので、我が家では買ってあげたくとも買えないようなものである。たくさんいただいてしまった。亡くなったワンちゃんにはお礼のしようもないが、時には愛犬様に食べてもらうことにしようとおもう。おや、今、息子が愛犬様の散歩の準備を始めた。そんなことがあっても、わが愛犬様は、なお、佐藤さんのお宅の前に、今日も勇んでゆくのである。悲しくも、熱心な行動である。

琵琶

(8) 家族を救え

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2005/10/8_433d.html

2005/10/30

家族を救え--我が家の愛犬様(8)

「我が家の愛犬様」と題して、我が家の元気者の紹介を記事にしたところ、なぜか、会う人が、皆、ニコニコと接近してくるようになったような気がする。これも愛犬様のおかげだ。感謝、感謝。

ところで、愛犬様の記事は、家族にもおおむね好評なのだが、最近、小さなクレームがあった。「かわいそうだよ、お父さんはあいつの情けないところばかり書いてるじゃないか」「そうね、いいところも書いてあげなくちゃ」と言うわけである。私は、あやつのいいところを書いたつもりなのだが、私と息子や家内では評価の基準が違うらしい。

そういえば、愛犬様は見かけによらず、家族思いなのである。家族を気遣うところは、ヒト以上である。いや、ヒトが発達する現代文明の中で自然な家族思いの感情を忘れかけているだけのことで、自然児である愛犬様は生き物として当然の感情を持続しているだけなのかも知れない。息子が愛犬様のお散歩当番のときは、息子と愛犬様のふたり(一人と一匹?)で出かける。私や家内が当番のときは、愛犬様と私のふたり(一人と一匹?)、または愛犬様と家内のふたり(一人と一匹?)で出かける。たまに、私と家内と愛犬様のさんにん(二人と一匹?)で出かけることもある。家内は、もともと運動が苦手である。ましてや、車に撥ねられて(「妻が、車に撥ねられる(1)」

<http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/01/1.html>)からと言うもの、走ったりするのは楽ではない。愛犬様と家内のふたり(一人と一匹?)で出かけるときは、愛犬様がソリを引くの犬のごとく、ひき綱を目一杯ピンと張りつめるので、家内ははや足にひきづられるように歩き続けることになる。私は、老いてはいるものの、まだ、少しは走れるので、手綱が緩んでいることのほうが多い。愛犬様が本気で走れば私もとうてい追いつかないが、我慢できる程度には愛犬様も手加減してくれる。

さて、問題は、お散歩のとき、私と家内が一緒の場合だ。私が手綱を握るとこうなってしまう。道の曲がり角から次の角までは、一気に駆け進む。愛犬様は曲がり角では自分のテリトリを誇示するためにオス犬らしく猛々しく放×すると、すぐさま、次の角に向かって突進してゆく。家内は取り残されて、後方を彼女としては精一杯の速度で走ってくる。愛犬様は、突然、立ち止まって後ろを振り返る。「あれっ、オカアサンがない。しょうがないな、待ってやるか」と言うように、後ろを振り返ったり、進行方向や左右を忙しく観察しながら待っているのである。家内が追いつけば、また一気に駆け出す。愛犬様は、疾走と放×の快感に浸って、時々、家内を待つことを忘れて、振り返りもせず角を曲がって次の角へと疾走してしまうこともある。そんなとき、私が「あれっ、

オカアサンは?」と問いかける。愛犬様は眉間に深いしわを寄せて、あわてて、後ろを振り返る。「あっ、お母さんが来ていないぞ」と突然、不安げな顔になる。不安なときは、首を下げ、上目遣いに周囲をうかがうのでそれとすぐに分かる。不安げに待つこと1-2分、「オカアさん」が到着すると、頭をもたげて、嬉しそうな表情をすると、嬉々としてまた歩き始める。犬は群で生活する習慣を持っている。一緒に行動する群の仲間が一匹(一人)でも欠ければ、犬としては不安になるのだろう。ところで、10月の上旬に震度4強を記録する地震があった。茨城県沖が震源地である。休日だったが、私は仕事仲間との打ち合わせと一杯のために出かけていた。都心に向かう地下鉄の中でその地震に遭遇した。電車は長いトンネルの半ばで突然ブレーキを踏んで停止した。しばらく、車内アナウンスもない。乗客は、不安げに周囲を見回す。誰しも無言だ。私は、ここから地下を歩くと次の駅も前の駅もかなり遠いな、どの方向に歩いたほうがいいのか、と一瞬考えた。そのとき、車内アナウンスは、「地震発生のため、列車は自動停止しました。しばらく停車します。そのままお待ちください」と告げた。そうか地震か、電車に乗っている私たちには感じなかったが、たぶん大きな地震だったのだろう。私の家族はどうしているか、とやや心配になる。家内は別件で出かけると言っていた。やはり列車の中だろうか。隣に住む老母はどうか、息子(老母の孫)がそばにいるから何かあっても対応するだろうなどと思い巡らせた。携帯電話は電波が届かないようで、つながらない。

ちょうどそのころ、息子は愛犬様とお散歩に出かけたところだったそうだ。出かけるとすぐに家内に追いついた。家内は近くのバス停でバスを待っていたそうだ。愛犬様は、「あっ、オカアサンだ」と急いで駆け寄って、前足をそろえて高く挙げ家内に差し出す。家内は、二つの足を両手で受け止めてから、頭をなでる。愛犬様は満足して、前足を下ろす。いつもの行動である。愛犬様は家内に挨拶を済ませると、またお散歩の足を進めて、家内のいるバス停を後にした。息子も一緒である。愛犬様は元気に走る。息子も走る。その先の角を回って、さらに進んで、さらにその先の角を左に曲がったあたりで、愛犬様は、突然、ガバッと向きを変えると気が狂ったように暴れだしたそうである。手綱を自分の口にくわえて、奪おうとするかのように激しく左右に振る。何事がおこったのかと、息子が綱をたぐり寄せようとする、愛犬様は2度3度と宙を舞って、激しく抵抗する。綱は愛犬様の体に巻きついてしまう。そのまま、強く綱を引くと、窒息してしまいそうなので、息子がやや手を緩めると、愛犬様はいま来た道を逆方向に一目散に走り始める。息子も全力疾走だ。愛犬様は、耳を伏せ、歯を食いしばり、全力で息子を引くように走る。角を2度曲がって、バス停までの直線コースに入ったところで、とうとう、手綱は息子の手を離れて、愛犬様の体の後に宙を舞ってゆく有様だった。愛犬様は、家内の姿を見つけると、いっそう力をこ

めて飛ぶようにやってきて、遠くから、一気に飛んで、家内に飛びつく。家内は愛犬を受け止めようとよろけた。愛犬様は、耳をぴったりと後ろにつけたまま、家内の手や顔をぺろぺろとなめた。

実は、散歩の途中に愛犬様がガハッと向きを変えた瞬間、地震があったのだ。息子は走っていたので気づかなかった。しかし、自然児愛犬様は、走っていても、この異変に気づいたのである。愛犬様は、とっさに、いささか運動能力に問題のあるオカアサンが心配になったのだ。何事かあってはならじと、なりふり構わぬ行動に出たのである。バス停で無傷の家内に再会した愛犬様の喜びようは尋常ではなかったようだった。息子は遅れてバス停に到着して、家内から、たった今大きな地震があったんだよ、と聞かされて、なるほどと合点がいったようである。

お前は、ほんとうにいい奴だよ。お母さんを心配してくれてありがとう、私はこの話を聞かされて、愛犬様に感謝した。しかし、お前のおとうさん（私）も、その頃、地下鉄に閉じ込められて、不安な時間を過ごしていたんだけどな、と一瞬、妬みたい気分にもなった。まあ、知る由もなかっただろうし、群のボス（私のこと）は強くて当たり前と思っているのだろうと自分を慰めた。本当に、愛犬様は、家族思いで、弱いものをかばおうという今どきの人間様にはないような男の子らしい精神の持ち主である。

（息子さん、奥さん、こんな紹介でいいですか。・・・？）

閑話休題。

琵琶

（９）夜明けの散歩、巨大犬との遭遇

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei/log/2005/12/9_da71.html

2005/12/11

夜明けの散歩、巨大犬との遭遇--我が家の愛犬様（９）

今日も朝は冷え込んだ。

愛犬様は朝の５時ころから落ち着かない。「オサンポ!」という声を待っている。夏は５時の散歩、さすがに最近の５時はつらい。５時半、愛犬様がキューン、キューンとご主人様を呼ぶ。

5時45分、「オサンプ！」という掛け声をかけると、愛犬様はパッと駆け始める。我が家の愛犬様とのお散歩の開始である。愛犬様は、最初から疾走を求めている。私は昨夜のアルコールが頭を締め付けている。まて、まてっ、と心で叫びつつ、私も走る。ままよ、汗でもかければ体からアルコールが抜けるかなと考える。周囲はまだ漆黒の闇。近隣はまだ寝静まっている。空気は冷たい。身が引き締まる。

愛犬様が好きな鉄塔通りのグリーンベルトで、密集する草の上を行ったりきたり、土のおいをかいだり、おしっこをしたり、ときには仰向けになって背中をこすり付けたりとうれしくてたまらない！を全身であらわしている。

グリーンベルトに飽きると、次の大好きスポットである町の公園に走る。ここは、地元の農家が、耕作しきれなくなった広い広い土地を町会に貸し出しているところである。周囲が木立に囲まれて房総大地のおもかげの残る一帯となっている。昼間は子供たちの野球場やサッカー場になっている。道路から一段と高くなっている入り口をすばやく駆け上がり駆け抜けて中に入ると、そこは、いっそうの暗闇である。足元の霜柱がひどく深いことに驚かされる。足をとられないようにと走る。

公園の中のグラウンドの半ばまで走り進むと、愛犬様がビタリと動作をとめた。何かを警戒したらしい。闇の向こうの木立の中で、なにやら白っぽいものがかすかに動いている。愛犬様は、やや身を沈めて、少しずつ、ゆっくりと進む。白っぽいものはどうやら軍手らしい。人がいる。そして、目を凝らすと、わが愛犬様の3倍はあろうかという巨大な犬がいる。まだこのお犬様はこちらに気づいていない。愛犬様は、獲物に忍び寄るライオンのように頭を低くしたままゆっくりと進む。足音はしない。ついてゆく私は愛犬様ほど巧みではない。足元ではガサコソと霜柱を踏み敷く音がしてしまう。闇の向こうの巨大な犬がはっとしたように振り返ると、いきなり、猛然とうなり始めて、地面を掻き立てて襲い掛かるうと走り掛ける。あちらの飼い主さんは必死だ。身を反り返らせて、ツナを引く。わが愛犬様も同じくらいのうなり声を上げて、地面を掻き立てる。私も必死だ。ツナを引き締める。愛犬様の足元のグラウンドの泥は、周囲に一気に跳ね上がる。相手の犬の周囲からは、猛烈な土煙が立ち上がる。私は、ゆっくりと、愛犬様を誘導しながら、右手に回り込むように移動する。相手のお犬様が、やや左向きの位置にいたからである。右手に回り込めば相手のお犬様は左手に逃れてゆくだろうという計算である。お相手の飼い主様も私の動きを察して、すぐに左へお犬様を誘導し始めた。こうして、両者は一定の距離を保ちつつ、巧みにすれ違うことに成功した。どちらかの飼い主が犬に負けていれば、壮絶な死闘がそこでは繰り広げられることになったに違いない。やれやれ。

わが愛犬様は、お相手のお犬様がいたあたりに到着すると、お相手のお犬様のおいを打ち消そうとばかりに盛んにおしっこをして、最後には

特大のウンコもした。愛犬様は得意げに私を見上げる。私がウンコの後始末をしている間、愛犬様はおとなしく待っている。しばらく公園の中を散策すると、愛犬様は満足して、公園の出口に向かう。足取りを緩めて、私の速度に合わせてくれる。いつもならば、まだまだ元気をもてあまして、どこかに飛んで行きたいとばかりに走るのに、今日はややおとなしい。巨大なお犬様との遭遇で、少しはエネルギーが発散できたのかもしれない。夜はしらじらと明けるつもりの時刻になる。自宅からはずいぶんと東のほうにやってきていた。「オウチ」と私が小声で言うと、愛犬様は、すなおに自宅に向かう道に入ってゆく。帰宅を承諾したのである。愛犬様は並足である。西に向かう道を私は大またかやや小走り程度で進んでゆく。帰路、日の出を迎えた。愛犬様が、においをかぐために脇にほんの少しの寄って立ち止まったあたりに、地元ではジジヒゲ（正式名称不詳）と呼ばれる蘭科の密生する自生植物が見えた。キラキラと凍り付いている。手に触れると固くもろくなっている。冬では当たり前の光景である。なおも進むと、陽の光に当たって、ジジヒゲは表面の氷が解けかけている。

朝陽注ぐ、ジジヒゲの凍てつくや、蘇る（琵琶）
愛犬様は、もうすっかり、私の足の速度に合わせている。やっとお散歩に満足したのだろう。我が家は目の前である。
愛犬様は、私の体と心の健康のもとである。酒はすっかり抜けたようだ。

琵琶

(10)うれしい! 怖い! 大雪!

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei/log/2006/01/___10_c8c4.html

2006/1/22

うれしい! 怖い! 大雪!--我が家の愛犬様(10)

おとといの晩から降り始めた雪は、昨日も止まず、関東では近年珍しい大雪になった。庭にも20センチ以上は積もっている。山道の吹き溜まりなどでは40センチにもなっているところがある。

昨日は、一日慌しかったので、愛犬様のお散歩は息子にお任せした。雪の中の散歩であった。愛犬様は、ヒトや犬の足跡のない処女地帯を見つけると一目散で走ってゆき、処女雪に飛び込んで、雪にもぐってはジャンプして、次の処女雪に飛び込むという喜びようだったと息せき切って

返ってきた息子の報告。愛犬様に付き合った息子も汗びっしょりである。私が連れて行かなくて助かったかも知れない。愛犬様は雪が大好きなのである。うれしくてうれしくて仕方がないのだ。

今日の朝も息子がお散歩に連れて出かけた。帰ってきたとたんに愛犬様は庭でほえている。何事かと様子を見に行くと、私と一緒に雪と遊びたいという希望を全身で現していた。息子も、「ちょっと庭で遊んであげてよ」という。頼まれてせざるは男にあらざるなり、とばかりに、私は庭に出る。愛犬様は雪だらけで、私に飛びついてくる。よっしゃ、とばかりに庭に走り出る。庭のほとんどが処女雪である。父が残した私の家の庭、老母の隠居所、兄弟の土地を合わせると600坪ほどになる。ちょっとした小さな公園くらいにはなるだろう。愛犬様は、走る、はしる。雪に飛び込んでジャンプする。私が遅れがちになると、くるりと向きを変えて、私に「速く、はやく」とじれたように軽く飛び掛る。しばらく庭を駆け巡ったあと、私が疲れて、「カエロウ!」と声をかけると、しぶしぶ玄関の方に帰った。それでもいくらか満足したのか、愛犬様は、少しおとなしくなって、玄関先の雪の上に立って、周囲を見張るいつもの「番犬業務体制」に入った。群れのボスである私と喜びの行動をともにしたかったに違いない。

やれやれ、昼間は元気だなあ、というのが私の内心の声。実は、愛犬様は、雪の日の夜には、格別にたいへんな甘えん坊なのである。愛犬様のベッドは、玄関の中にある。玄関の床はアルミを使った複合断熱材が敷いてあり、その上に古い毛布を広げて、その上にヒトの寝る布団をたたんで重ねた高いベッドがある。夜になると玄関の内りをダンボールで囲って、電気温風ストーブを入れる。寒さは感じない環境である。しかし、電気を消すと、窓から差す光がいつもと違うのである。白い白い、一面に白い外の光がほのかに感じられる。こんな夜は、愛犬様は苦手である。雪の夜は怖いのである。群れで身を寄せ合って、互いの体温で暖をとりながら、周囲の安全も交代で確認しながら夜を過ごすのが、オオカミの時代からの習慣なのだ。でも、人間様は冷たいやつらで、雪の日も、愛犬様をほうって自分たちは勝手に寝てしまう。ひどいやつらなのだ、愛犬様には不満が募る。愛犬様は、私が帰宅して、食事を終えると、グルグルとないたり、小さな叫びを上げながら、寝床の周囲で2本足で立ち上がったたり、ジャンプしたりして、私を呼ぶ。玄関の上に上がって、私のひざに乗りたいたのである。いつもの、ダッコ-ゴロニャンタイムだが、雪の日は、一通りゴロニャンした後も寝床にはなかなか帰らない。白い魔物の影におびえて、私のわきの下に頭をつっ込んだまま、ひざから降りようとしなない。雪の日はこうして夜明けを待つのが一番と決めてかかっているのである。これでは私が寝られない。昨夜などは無理やりおろそうとしたら、ガォとほえて、おろそうとした私の手を噛んだ。痛い歯を貫通させるのはためらったらしくて傷にはならなかった。

コラッと、愛犬様を放り出して、私が立ち上がると、ウーッと激しいうなり声を上げて抵抗の姿勢である。こぶしを振り上げたら、尻尾を下げてブルブルと震えている。ボスに叱られた恐怖が全身を包んでいるようだ。こんなときでも手を出すと危ない。窮鼠猫を噛むではないが、窮地に陥ると、激しく自分の武器（牙）を振るうことがあるからである。やれやれ、やむなく、私が愛犬様の寝床に移動する。ベッドサイドの敷物の上に座って呼ぶと、愛犬様は玄関の上からタタキの上にしゅしゅ降りてくる。頭を低くして額にしわを寄せて、叱られないかと不安で一杯の表情である。私の体に頭を押し付けて、私が無抵抗でそれほど怒っていないことを確認すると、さっと、私のわきの下に頭を突っ込んで、ひざの上に腹ばいになる。クークーとすすり泣くように小さく鳴く。眼はしょぼしょぼ、オネムなのである。警戒のためか半目を開けたまま、やがて息は寝息になりかかる。私は、そっとベットの上に愛犬様を降ろして立ち上がる。愛犬様は、不満そうに半立ちになるが、睡魔のほうが強くて、そのままベッドに倒れこむ。やっと寝てくれた、、、。小一時間は過ぎていた。夜は、こんな甘えん坊で、・・・。ゴメンネ。またばらしちゃった。

琵琶

(11)メッ!、拾い食い

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/03/11_4b21.html

2006/03/03

メッ!、拾い食い--我が家の愛犬様(11)

今日は、愛犬様がかなりしょげている。当然のことだ、と私は鼻息が荒い。

今朝、散歩に連れ出すのが、少し遅れた。昨夜、私の帰宅が遅かったためである。愛犬様は、早く散歩につれて行けと狂わんばかりにほえて、泣いた。ゴメンよと連れ出したが、愛犬様は、情緒不安定、左右前後に小刻みに走り回る。盛んに茂みに首を突っ込んでにおいをかぎまわる。また、メス犬様のおいでも追っているのか、・・・、と私はあきらめ気味。と、愛犬様は、小さくチラリと私に視線を送ると、何かを飲み込んだ。シマツタ!、拾い食いだ。何を食ってしまったのか、分からない。拳固を振り下ろしたが、もうすっかり飲み込んでしまっている。我が家の家族は、拾い食いには、かなり神経を使っていて、愛犬様に拾い食い

はさせないように努力している。愛犬様もいけないことだとは知っている。たいていは、拾い食いしそうになったら、ハーネスを思いっきり引っ張り上げて、口の中に指を突っ込んでしまうところだが、失敗するとがぶりとやられて血だらけになる。修羅場になるのである。飼い主は怒る。愛犬様は抵抗してほえる。最後には、かまってやらないと放置する。放置されるのが愛犬様にとって一番のバツである。いけないことをしたのかな、とそのときやっと気がつくのである。何度も繰り返していたので、最近では、ハーネスを少し引き揚げるだけでも、やめるようになっていた。しかし、今回は油断していたので、飲み込まれてしまった。私は拳固で頭を手加減しながら叩く。抵抗せずに、うつむいている。いけないことをしたのは自覚しているのだ。叱られて、愛犬様はうなだれたまま、すべての寄り道をあきらめて、最短コースをただひたすら走り抜けて行く。もう、甘えられないと悟ったようだ。決まった場所でおしっこをして、ウンチをして、帰路に着く。拾い食いをしたところに戻ってくると、また同じ茂みに首を突っ込もうとする。ダメッ! と私が小さく厳しく言うと、あわてて、首をすくめて戻ってくる。わかってはいるようだが、また拾い食いのネタを探しに行くなんて、と私はぶんぶんしている。愛犬様はそんな私の様子を見て、またうなだれる。

自宅に到着しても、愛犬様は私から少し離れている。いつもならば、すぐに体を摺り寄せてくるのに、私が怖いのだ。仕方がない、手招きで呼び寄せて、肩を軽くパッティングする。うれしげに見上げて、盛んに尻尾を振る。私が、それほど怒っていないことがうれしかったようだ。いつものように、水を替えて、えさをあげた。横目で私を観察しながら、それでも尻尾を振りながら、えさにかぶりついた。私は、内心、もう拾い食いなんかするなよ、たっぷりえさはあげるんだから、とつぶやいた。お腹でもこわしたら、どうするんだ。・・・子供に対する親の心の動きと同じだな、と自分でも感じた。

愛犬様の拾い食いを見逃したことは、他の家族から、うんとしかられそうだ。やれやれ、こうして、今日も、事件な一日が始まった。

琵琶

(12) 正座で叫ぶ、クリクリ目

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei/log/2006/03/12_6e53.htm
↓

2006/03/13

正座で叫ぶ、クリクリ目--我が家の愛犬様（12）

2日ほど前の出来事である。

土曜日（3/11）、私は久々の休日となった。夕刻、仕事仲間たちと私の3人が会食をすることになった。神田界隈の職人好みの古い居酒屋に行くことになった。

午後4時ころ、家を出ようとする、愛犬様は私が散歩に連れて行ってくれるものとうれしくてはしゃぎだした。そうか、そろそろ夕刻の散歩の時間だ。今日は息子が友人たちとどこかに出かけてしまった。私の奥さんが今日のお散歩がかりである。私ではない。しかし、愛犬様は、私が外出の支度を始めたのを目ざとく見つけたのだ。まずい、私は、玄関の陰に隠れて、奥さんに早く散歩に出発してくれと頼む。

奥さんは、愛犬様にハーネスをつけてあげると、いつものように愛犬様に出かける合図。愛犬様は尻尾をフリフリ、歩きはじめる。我が家の敷地を出て、わが一族4軒共通の私道を抜けて、道路に出るところで、愛犬様は、私が付いてきていないことを発見した。あわてて、甲高い声で吼え叫ぶと、奥さんを引きずるように玄関まで走って戻ってくる。仕方がない。待ち受けて、鼻面を手のひらで受け止めて、「オサンポ!」と小さく言うと、安心したのか、くるりと向きを変えて、また外に向かって尻尾をフリフリ歩いてゆく。シメシメ、これで私は逃げ出せるか、と思いきや、またしても私道から道路に出るあたりから甲高い叫びが聞こえると、たちまち愛犬様は、私の前に飛び込んでくる。もう、私が「オサンポ!」と言ってもダメである。「もうだまされないぞ」と決意しているらしく、一瞬前を向いてもすぐ後ろを振り返って、私が動こうとしないとすぐに走りよってくる。こりゃダメだ、私も一緒に出よう、と奥さんに告げて、いっしょに歩き始める。愛犬様は、私の方への視線を怠らない、もう逃がさないぞといわんばかりである。

いつもの散歩コースは私道を出ると左に進む。私はバス停に向かうので右に向かう。愛犬様が左に折れたので、シメシメと私は右に向かおうとした瞬間、パッと身を翻すと、愛犬様は私のほうに向かって走ってくる。奥さんは、引きずられて前のめりである。やれやれ、逃げられない、ままよ、バス停までは一緒に行こうと声をかける。やむを得ず奥さんも愛犬様と一緒についてくる。尻尾フリフリ、愛犬様はルンルンである。休日は家族のボスの私と一緒にいられるのがうれしいのだ。

バス停で私は立ち止まる。愛犬様と奥さんはずんずんと歩く。しめしめ、行ってくれるのはありがたい、私は内心安堵した。30メートルほど進むと、愛犬様は、ハッと気が付いた、私が付いてこないのだ。いきなり甲高く数度吼え叫ぶと、全身の力を込めて奥さんを引っ張る。ああ、ダメだ。愛犬様が駆け戻って到着するとバス停で私は、愛犬様の背中をさすってやる。少し落ち着くと、奥さんは、また歩き始める。愛犬様も付い

てゆく。また 30 メートルもすすんだところで、また、愛犬様は、私と奥さんの姦策に気が付いた。甲高く数度吼え叫んで、また一目散に駆け寄ってくる。もう梃子でも動かないという顔である。私が体を回すとその前に回りこんで、座り込む。

まあ、バスに乗ってしまえば、こっちのものかもしれないと奥さんと話し合っ、バスを待つ。バスは予定通りすぐに来た。私はバスの昇降口に向かう。愛犬様は、不安で一杯の顔になる。いきなり吼える。私がバスに乗り込む。愛犬様は吼えては、飛び上がって、空中で身を反転させてハーネスをはずそうとする。私を追ってゆこうというつもりだ。奥さんも必死だ。ハーネスが外れたら、もう手に負えなくなる。奥さんは愛犬様を抱きとめようとがんばる。私はバスの車内を歩いて、愛犬様のいるバスの後方近くの席に移動する。愛犬様は、私を見つけて、窓に向かって気が狂わんばかりに吼える。飛び上がる。私が車内から、バイバイと手を振ると、愛犬様は、その場にペタリと正座して、目をまん丸にして、耳を前方にそろえて、そのままの姿勢で吼え続ける。いつもはキツネ目で、人をにらみつけているのに、このときばかりは本当にまん丸の目である。「オスワリ」の正座は、主に老母がしつけた。「ちゃんとおすわりできたら、オヤツをあげる」という具合である。愛犬様は、以来、人間様にどうしてもやってほしいことがある場合にはキチンとオスワリするのである。このときも、「ボクの言うことをきいて!!! 置いてかないで!!!」という精一杯のゼスチャなのだ。あんなにかわいい目も見たことがない。クリクリとした目を見開いている。後ろ足はキチンとそろえてオスワリして、前足もチキンと前でそろえて、一点の非もないイイコの姿勢なのだ。視線は私に向けたまま、うつむき加減に、軽く足踏みするようにしてつぶらな瞳を見開いて、激しく悲しげに鳴く。バスの乗客は、関わりたくないのか、そ知らぬ顔をしている。それがせめてもの救いだ。

・・・内心、参ったな、、、と思いつつ、ここで負けては、私の仲間との約束が果たせない。心を鬼にして、バイバイの動作をくり返す。やがてバスは走り出す。愛犬様も吼えながら、バスを追う。奥さんは、必死につなを引く。だんだんと、私の乗ったバスは愛犬様から遠ざかってゆく。角を曲がると愛犬様の姿はもう見えない。もう一度角を曲がるともうすっかり声も聞こえない。大丈夫だろうナ。つなが離れて、バスの後を追って走ってきたりしないだろうか。と私はずうっと後ろが気になって仕方がない。バスが最寄の JR の駅に着くと、私は、さっそく、奥さんの携帯電話に電話かける。・・・、大丈夫、やっと落ち着いたから、とのこと。私もやっと安堵した。

第二次大戦の末期、上野動物園の象に餌がなくなって、上層部から処分が命じられた。象使いは殺すに殺せなかったが、食べさせる餌がない。象は、象使いの前で、ひざを曲げ、オジキをしたり、前足と鼻で体を支

えて逆立ちの芸をしてみせたりして、餌をねだった。それでも餌がもらえなかった象はやがて体が衰えて亡くなったが、象使いは、ただただ泣きたと伝えられている。愛犬様の様子を見ながら、そんな話を思い出していた。そんな悲しい出来事とは程遠い、平和な時代でよかったとも思う。

おいしいお酒は2次会までにして、3次会は、一人で抜けてきた。愛犬様にちょっとだけ悲しい思いをさせたから、私も少し罪滅ぼしをしてやろうと、そそくさと家路に着いた。

琵琶

(13) 草原に生きる習性

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/05/13_3775.htm
↓

2006/05/04

草原に生きる習性--我が家の愛犬様(13)

大型連休の合間である。今年は、あまり愛犬様のお遊びに付き合っていない。3大学6教科8コマの講義をこなすというのは容易ではない。特に、コンピュータ系の講義なので、毎年講義録を書き換えなければ時代の進歩には付いてゆかない。「毎年」と書いたが、春学期と秋学期に同じ科目を繰り返す大学の講座もあるのだが、学期を越えともう講義録は古くなっている。3か月もすれば、記述はもう古いのである。

私は、すべての講義で講義録を自分で作成する。当日の朝、学生にはメールなどの電子的手段で届けられる。学期の間中は寝る暇もおしい。これに加えて、今年は大学院大学の設立のお手伝いを頼まれた。うまくいったら専任教授にしてくれるというエサが付いている。さもしいようだが、正直魅力も感じなくはない。どのような結末になるかは不透明だが、まだ事柄は進行中なので多くは語れない。ネットワークを介した通信制を採用しようという試みである。本拠のある美しい地方都市との往復、書面の精査、システム仕様の検討など、ボランティアの活動が重くのしかかった。今年は申請を見送ったが、来年また申請することになりそうだ。

その合間に、本業のシステムハウスの経営と営業をみななければならない。このブログの更新も滞り勝ちである。

本日の午後は、思い切って仕事を中断して愛犬様を遠くに連れ出すことにした。妻と息子にも早くから宣言して、同行してもらうことにした。実は、愛犬様は季節や良しで発情気味である。多少、体力を消耗しないと元気をもてあまして、大変なのである。

出かける直前息子はいきたくないと言い始めた。眠くなったのだという。愛犬様は私の外出しそうな気配に有頂天になって叫び飛び上がって騒いでいる。ええい、ままよ、息子を置いてゆこう。愛犬様に「クルマ!」と小さく叫ぶと彼は乗用車に向かって一目散に走る。ドアを開けると一気に助手席へ。助手席は愛犬様の定位置である。妻とともに車にのりこんで、走ることに15分、愛犬様は上機嫌である。助手席の左右に忙しく行き交いながら通り過ぎる犬たちに激しく吠え掛かる。私はあわてて左の耳に耳栓をする。ほうっておくと鼓膜が傷ついてしまうのだ。そうこうするうちに、妻の携帯がなる。息子からである。外出の支度をしているうちにわれわれに出られてしまったと息子はややご機嫌斜めらしい。取って返すことにした。愛犬様はかくしてドライブを予定よりも長く楽しむことができたのである。

もう一度、私たちが乗る乗用車は、江戸川の土手を目指した。愛犬様にとっては初めての道も通ったので、後半はやや緊張気味、窓から鼻を突き出してにおいをかいだり、周囲の景色を確認したりと忙しい。

やがて、緑豊かな農地が広がる江戸川沿いに到着する。愛犬様の興奮は頂点に達している。実は、このあたりにはめずらしい駐車場があるのである。駐車場にクルマを入れて、歩き出すと、もうたまらない。愛犬様はこの青々とした草の茂みが大好きなのである。ぐいぐいと綱を引いて愛犬様は進む。息子は40メートルの綱をいつもの引き綱に継ぎ足す。すぐに土手に到着する。土手は、初夏の若草に覆われている。イネ科らしいツンツンとした葉の草が高低を作って60-90センチには伸びている。1メートルを超える箇所もある。夏には150センチから2メートル以上にもなるが、今の時期はまだそこまでは大きくない。野生化した大麦の葉や穂も混じる。ヨモギやアカザの大株もある。愛犬様は、ケモノ道らしい細い踏み固められた場所をすばやく見つけると、これを駆け上がる。私も一緒に走る。愛犬様は草の中を掻き分けて走るの大好きである。一気に土手の上に上がるとそこは舗装された人の道である。とはいえ、両側は高く草が茂る。胸を張って、風を切るように半ば走り、半ばはや足で駆け抜けてゆく。時々、道端の草群れにおしっこをかけてテリトリを宣言することも忘れない。河原に下りる階段を見つけると、愛犬様は走って降りようとする。綱を引く私は足元が危ない。息子が駆け寄って、綱ヒキを替わってくれた。妻も私も河原に到着すると、愛犬様を先頭にわが群れ(家族)は、川に近い土手下を上流に向かってこぞって走る。左手にとうとうたる川がながれ、右手が小高い土手である。河原は最近草が刈られたらしくほぼ平坦である。一方、右手の土手は伸びた草がそ

のまま茂っている。土手の斜面に私が足をかけて誘ってみると、すっかり喜んで、愛犬様は土手の中腹に駆け上がり、草の中を駆け回る。急勾配の土手もたいそう気に入っているらしい。胸を張り、クビをピンと上に上げた体勢で走る。威風堂々という風情だが、良く考えると、草の茂みの中で行動する際のもっとも合理的な体勢である。下のほうは草が密集しているし、草の葉は硬い。上に行くにしたがって、草の密度は下がり、葉は柔らかいのである。顔に当たる打撃は、顔を上げておくことで少なくなる。私は感心して観察しているが、私の関心などどこ吹く風である。群れ（家族）がそろって近くにいる、草の中を走ることを許された、と、まあ、これだけのことでうれしくてたまらないのだ。愛犬様は上に行ったり、下に行ったり、前に走ったり、後ろに向かったり、長い綱を操る息子は大忙しである。

私は、土手の上に移動して愛犬様を手招きで誘うと、一気に土手上に駆け上がってくる。土手上をさらに上流に向かって歩くことにした。愛犬様は、尻尾をフリフリ、人の道を歩く。左右は高い草の壁である。右手の土手下から幼子のはしゃぐ声が聞こえた。と、このとき、愛犬様は、びっくりするような行動をしたのである。右の草の壁に駆け寄ると二本足をそろえて、ひょいと立ち上がったのである。クビも長く伸ばして、顔は声のする方向に向けた。草の丈は、立ち上がった彼の頭をまだ越えているが、上にクビを伸ばせば草の密度は低くなる。その高さは、外からは犬がいるとは見えない程度には隠れながら、相手はしっかり見える位置なのである。ああ、この犬は、広大な草原で生きる犬なのだと納得がいった。

思い返してみると、愛犬様は、いつもの散歩道でも、草の生えているところを好んで歩く。ウンチをするところも、草の生えているところである。土がむき出しになっているところや、コンクリートの道路では決してしない。そういえば、庭の出入り口に生えている芝代わりのシジヒゲの一面では、もぐりこんだり、腹ばいになったり、仰向けになったりして、体を擦り付ける姿がよく見られている。草とともに生きていた動物の習性が彼の体の中には脈々と流れているのだ。

今度は、左で大人の声がした、土手下に来た人々が大声で笑ったらしい。愛犬様は早速左に走り寄ると、またひょいと立ち上がって、土手下の河原の人影を草のすだれ越しに確認している。いわゆるチンチンの姿勢である。結構長く立ってられるのにはあきれのくらいだ。そうかそうか、私たちに甘えるポーズをするときに、立ち上がって、とんとんと手を私たちの体に打ちかけるのは、このしぐさの応用動作なのだ。

なんだか、愛犬様についての理解が深まったような気がした一日だった。愛犬様は、今、ぐっすりと寝込んでいる。やや疲れて満足したのかも知れない。

(14) さびしくとも頼もしく親離れの始まり

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/08/14_ccb3.html

2006/08/09

さびしくとも頼もしく親離れの始まり--我が家の愛犬様(14)

最近、愛犬様は、散歩の途中ライバルのオスに出会っても自分から喧嘩を仕掛けることが少なくなった。それでも、喧嘩を吹っかけられることはあるのだが、そのときは敢然と戦うのである。

人間様は相手の犬に傷つけてはならじと引き綱を目いっぱい引いて、宙に引き上げていたりするので、愛犬様は十分には戦えない。それでも目にも留まらぬスピードで空中でトンボをうつと相手の犬の首筋に噛み付いていたりする。熊と戦うときには十数頭の甲斐犬が宙を舞って飛び掛り、熊の肩や首、耳にぶら下がって動きが鈍くなったところで他の犬たちが腹や首を食いちぎるのだそうだ。引き綱で宙に引き上げるくらいでは、平気なのだろう。ある日、息子が散歩に出かけると日ごろから乱暴な犬が執拗に食らいついて来た。1分にも満たない接触で、結果としては相手の犬が逃げていったのだそうだが、愛犬様は動きが不自由な中で、不覚にも前足に切り傷を負ったらしい。

その日の夜、いつものように愛犬様はクーンクーンと私を呼んだ。私は夕食もそこそこに彼のそばに行く。すると、いつもと同じに愛犬様は急いで自分の晩御飯を平らげて、水を飲み、玄関のたたきから床上までの小さな段差に手をかけた。これもいつものことだが、私のひざめがけてすぐにのぼって来るはずである。しかし、彼は手をかけたまま躊躇している。どうしたのかな、とよく見ると、前足に血が出ていたのである。帰ってから、しきりに前足をなめていたという。手を伸ばして、頭をなげつけ、あごの下をさすり、傷ついた前足をそっとさすると、満足したように寝床に戻って横になってしまったのである。あれね、抱っこしないのか、私は少し驚いた。動物は自分が傷つくと群れの他のメンバーに迷惑をかけないようにやや距離を置くのだそうである。

次の日も、同じだった。傷ついた日から数えて3日目、傷はいえた様だった。この日は、だいぶ逡巡したように、たたきの中を巡回した後、意を決したようにひざにあがって、私のわきの下にうつぶせのまま頭を突っ込んでさんざんに甘えてから寝床に向かった。その次の日は、またひ

ざに上がらずに寝てしまった。そしてさらにその次の日も同じだった。さあ、上に上がっておいでと手を出すとウーと低く叫んで噛み付いても来た。「抱っこは嫌だ」といわんばかりなのだ。もはや傷とはたぶん関係がない行動である。考えてみれば、愛犬様はもはや4歳と9か月、人間で言えば18-9歳の青年である。やっと大人になりかかっているに違いない。飼い犬はいつまでも親離れしない子供のままとよく言われるが、日本でオオカミに一番近い犬といわれる甲斐犬の血を引く愛犬様は、自然児のように親離れするのもかも知れない。頼もしくなったものだ、ちょっとうれしくて、ちょっとさびしかった。前足が傷ついたことは単なるきっかけだったに違いない。

しかし、その翌日、すなわち昨夜のことである。長く逡巡した後、耳を伏せて、頭をひときわ低くして、玄関の床に上がってきた。おずおずと私のひざに乗ると、思い切り体と頭を押し付けてきた。自分からひざの上で丸くなると、自分で仰向けになるなり頭を私のわきの下に差し込んできた。これはかれの一番の甘えポーズなのである。私は思わず孫を抱く爺さんの心境になっていた。多分台風接近のための風雨の音と雷鳴が彼の心を弱くしたのだろう。まてまて、ここで妥協しては親離れに失敗する、と思ったのは、彼がすっかり甘え終わって寝床に向かった後だった。心弱きは親というものだなあ、と自分の息子の子育てを振り返りつつ、反省しきりだった。

・・・、こんばんはどうかな、、、と思いかげながら、ぶるぶると頭を振ったりする私の今日一日である。

琵琶

(15) 我輩は愛犬様である

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei/log/2006/08/15_6128.html

2006/08/14

我輩は愛犬様である--我が家の愛犬様(15)

あれから、かれこれ10日ほどは経っている。愛犬様は、なかなか複雑な行動をしている。今日は私のひざには上がらなかった。今日の愛犬様の行動を愛犬様の言葉で語ってもらうことにしよう。

我輩は、愛犬様である。ご主人様は零細企業の社長をしているが、いくつかの大学でも教員をしているらしい。そんなことはともかく、ご主人

様はまったく気まぐれで、いつ帰宅するのかわからない。まだ陽のあるころに帰宅したかと思うと翌日には草木も眠る丑三つ時に帰宅する。それはまだ我慢ができるが、夜が白々あけたころ帰ってくることもある。我輩はずうとずうと帰宅をまっているんだぞ。せっかく帰ってきたのだから、ひざに乗って甘えてやろうとしても、ひざに乗ったとたんにご主人様はこっくりこっくりと居眠りを始めることもある。やれやれ、何のために甘えてあげているのかわからない。

さて、我輩もそろそろ嫁がほしい年頃で、そうそう人間様に甘えてなどいられない。早く大人になって、人気のフルールちゃんやメリーちゃんに「しっかりしたワンちゃんね、ワン」と一目置いてもらいたいのだ。しかし、ご主人様が帰ってくると、なぜか、ちょっとかまってほしいと気も狂わんばかりの感情に襲われる。ポチタマ犬根性なのが我ながら実にくやしい。

今日は、ご主人様が比較的早く帰ってきた。ご主人様の会社は夏期休暇で、ご主人様もオフィスの様子を見に出勤はしたものの、早々と帰って来たのだそうだ。

帰ってくるとご主人様は、我輩にちょっと愛想を言うとすぐに家の奥に行き、なにやら台所でしているらしい気配である。ここのご主人はよく料理する。人間様の家族のエサは、ほとんどご主人様が作っているらしい。けっこういいにおいがする、、、。ちえっ。オレ様のことはかまってくれないのか。ちょっとだけ、小声で呼んでみた「クン、クン、、クーン」。ご主人様は知らん顔だ。聞こえないはずはないはずなのに、なんていう奴だ「ワン!」。今度はちょっとだけ大声を出してみた。「おいおい、ちょっと待ってな、食事をしたらゆくからね」とご主人様の声。やれやれ、人間とは身勝手なものだ。自分でエサを食べ終わらないと我輩の方を見てはくれないのだ。まあ、でも、これはいつものことなので、しばし待つことにしよう。Ssss,Mmmm,...、いかんいかん、いつの間にか眠ってしまった。あれ、ご主人様がそばに来ている。えっ、やっぱり、ボクのがすきなんだ。うれしい(^^)/。

さて、まず、我輩は食事をしなければいけない、、、。だってこの後、寝てしまうことになると思われなくなってしまうもの、、、食べるのは今のうち、、、パークパク、バリバリ、ムシャムシャ、うまい、うまい。お水をシャブシャブ、ゴクゴク。パークパク、バリバリ、ムシャムシャ、うまい、うまい。お水をシャブシャブ、ゴクゴク。・・・あーあ、すっかり食べたぞ。ご主人様は逃げたりしていないよな。ふむふむ、ちゃんと座って、待っているな。さて、おひざに抱っこされに行くか。右手をこの段にかけてっと、えっ、そんなことして男の子としての威厳が・・・。やめやめ、今日は抱っこしないぞ。でもどうしよう。目ヤニくらいはとってくれないかな、、、あー、抱っこしないととってもらえないんだ。じゃ、お布団のタオルケットにゴシゴシ押し付けて、目ヤニ

をとってしまおう、ゴシゴシ。うまくとれないよう……。ゴシゴシ。
あっ、ご主人様が手を出して目ヤニを指先でふき取ってくれた。うれし
いっ。あっ、だめ。あごの下なんかなぜちゃ、、、気持ちいい、、、。
えっ、あがって来いって? やだよ。ボクは大人なんだぞ。首輪なんか
つかんじゃダメだよ、その気になっちゃうだろう!!! プンブン、ガォ
ー、ヴァン。カブッ。、、、あっ、ご主人様の手を噛んじゃった。ゴ
メ〜ン。

えっ、ご主人様は、あきらめちゃったみたい、さっさとそばを離れて行
っちゃうよ。玄関の上で上がろうかな、いいや、ダメ、ここで妥協しち
ゃ、ボクは大人になれない、、、。我慢がまん。、、、えっっ、ほん
とに行っちゃうの?? さびしいなア、でも、いいか、イヤッ、行っちゃ
イヤ、待って〜、、、、いやいやここは"がまん"、、、。ええいっ、寝
ちゃうぞ。我輩は、クルリと後ろに向きを変えると丸くなって横になっ
た。あえてご主人様の顔は見ないことにした。へへっ、ボクっておとな
でしょ。 オヤスミツと、、、。、、、モゾモゾ、、、なかなか眠れ
ないよう〜。クン、ク〜ン。

琵琶
